

國學院大學学術情報リポジトリ

2016年度のトピック9 出張報告 American
Academy of Religion, Annual Meeting
2016(アメリカ宗教学会、2016年度大会)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星野, 靖二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001913

出張報告

American Academy of Religion, Annual Meeting 2016 (アメリカ宗教学会、2016年度大会)

米国、テキサス州、サンアントニオのヘンリー・B・ゴンザレス・コンベンションセンターにて2016年11月19日から22日にかけて開催されたアメリカ宗教学会(AAR: American Academy of Religion)の2016年次大会に参加した。主に日本宗教に関係するパネルに参加し、北米の日本宗教研究者と交流した。また2016年の大統領選挙の結果、ドナルド・トランプ氏が次期大統領候補となったことを受けて、学会全体がどのような姿勢をとるべきかについて議論するパネルにも参加した。紙幅の関係上、参加したパネルの題目のみを以下に記す：

11/19(土)午前：国際真宗学会主催のパネル“An Ancient Doctrine for New Times: The Shinzoku Nitai in Modern Japanese Buddhism”に参加。

同午後：日本宗教研究グループ主催のパネル“Japanese Buddhism and the Fifteen-Year War (1931-1945)”に参加。

同夕刻：世俗主義と世俗性グループ主催のラウンドテーブル“Superstition, Secularism, and Religion: Testing a Trinary”に参加。

11/20(日)午後：日本宗教研究協会主催のパネル“Religious Vocations in Modern Japan”に参加。

同夕刻：スペシャル・トピック・フォーラム“Critical Thinking, Inclusion, and Moral Responsibility in the Wake of the 2016 Election”に参加。その後レセプションに参加して日本宗教の研究者たちと交流し、意見交換を行った。

11/21(月)午前：スペシャル・トピック・

フォーラム“Post-Trump Election”に参加。

同午後：日本宗教研究グループ主催のパネル“Japanese Religions under Depopulation”に参加。

同午後：仏教セクションと日本宗教研究グループ共催のパネル“De-Centering and Re-Centering India and Sanskrit: Translation and Canonization in Three Cases of Japanese Buddhist Scholarship, 1700-1945”に参加。

11/22(火)午前：比較宗教セクションのパネル“Transnational Religious Expression in America: Asia in Translation”に参加。

アメリカ宗教学会(AAR)年次大会は聖書文学協会(SBL)の年次大会と合同で行われ、北米英語圏の宗教研究に関する学会としては最も大きいものとなる。発表の申請がパネル単位であり、かつ日本宗教研究にわりあてられている数が必ずしも多くはないため、日本の研究者が発表者として参加することには難しい面があるが、今回は北米の日本宗教研究の状況を把握するということ、また北米の日本宗教研究者たちと交流を深めることを目的として参加した。二つの目的を共に良く果たすことができたが、特に後者については、今後のパネル申請を検討することにもつながりたいと考えている。

日本宗教研究に関連するパネルを聴講し、アメリカにおける日本宗教研究の状況について理解を深め、研究者たちと意見交換を行った。以前からの傾向であるが、マテリアル・カルチャーについての研究発表や関心が一定程度見られた。

また、仏教研究、特に近代仏教研究についての強い関心が窺われた。もともと日本でも近代仏教研究は、対象がトランスナショナルな広がりを持っているだけではなく、研究者たちの国境を越えた交流も盛んに行われているが、今回のAARでもその一端を見ることができた。また、若手の研究者が多く関わるようになっていることも確認できた。

日本宗教研究以外の全体的な状況について、ドナルド・トランプ氏が大統領選で勝利した直後に開催された学会であり、今後トランプ大統領の下で、学会としてどのような対応を取っていくべきかということを論じるスペシャル・トピック・フォーラムが二つ設けられた。この両者に参加した。

20日の夕刻に行われたスペシャル・トピック・フォーラムは、主催者側が何人かのスピーカーを選定して論点を提出し、その後参加者全員によってオープンな議論を行うというものであった。それなりの広さの会場ではあったが、立ち見が出るような状況であり、発言も次から次へと行われた。前述したようにSBLとの共催ということで、宗教学者だけではなく、神学校などキリスト教の教育機関で教育に携わっている立場の人からも多く発言があった。モデレーターより、アメリカ宗教学会としてどのような対応を取っていくべきか参加者の意見を聞きたい旨、冒頭で発言があり、学会として態度表明をする必要があるという考え方が窺われた。様々な人種・職業の人々が発言したが、アメリカを分断するような主張や思想は批判されるべきであること、またそれをどのように教え、かつ公共的なメッセージとして訴えていくのかを考えなくてはならないこと、そしてそこに総体としての学会がどのように関わるのかを明示すべきこと、などが論じられていた。特に、宗教についての教育は、そもそも多様性を認め、受け入れることと結びついている、という主張が印象的であった。

21日の午前中に行われたスペシャル・トピック・フォーラムは、参加者が各テーブルに分かれてオープンなディスカッションを行い、その後各テーブルで提出された論点を会場全体で共有し、最後にその論点毎にまた別のグループに分かれて議論するというものであった。報告者が参加したテーブルでは、最初に各自が経験している状況を共有することで、一人ずつ大統領選後の状況について述べた。ある神学校の教師は、以前は人種間の対立のようなものは見られなかったが、選挙後に人種的な問題に起因すると思われる事件（例えば、止めてあった車に瓶が投げつけられてガラスを割られた学生がいたという）が生じるようになったとした。また、オランダから参加していた研究者でありジャーナリストである人物は、オランダの排外主義を念頭に置きながら、アメリカの状況を憂慮しながら注目しているとした。報告者はメディアのあり方など日本の状況との並行性について述べた。また、ある都市の貧困地域で牧師をしているという参加者から、敵と味方を切り分けるような単純で分かりやすい議論の方が、よく受け入れられてしまっているという状況こそが問題であるという論点が提示された。その人物は、教育は異なる視点を提示しうる点において重要であることを確信していると述べると同時に、しかし日々無力感を感じざるをえないとも吐露していた。これを受けて、報告者が参加したテーブルでは、明確な答えこそ出なかったものの、それではどのようにそうした人々に声を届かせることができるのかということが論じられた。他には、学会として出すべきステートメントを検討するグループや、適切な教材や参考文献リストを検討するグループなどに分かれて、議論が行われた。全体を通して、彼我の違いを含め興味深く、学ぶ所が多かった。

（星野靖二）